Bulletin of Aichi Univ. of Education, 69（Humanities and Social Sciences）, pp. 1 − 8, March, 2020

小学校英語教育における「読むこと」「書くこと」に関する評価

高橋 美由紀*　山内 優佳**　柳 善和***

* 愛知教育大学
** 広島文化学園大学
*** 名古屋学院大学

On the Assessment of Reading and Writing in Elementary School English Teaching

Miyuki TAKAHASHI*, Yuka YAMAUCHI** and Yoshikazu YANAGI***

*Department of Graduate School of Practitioners in Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan
**Hiroshima Bunka Gakuen University, Hiroshima 731-0136, Japan
***Nagoya Gakuin University, Nagoya 456-8612, Japan

1. 研究の背景

小学校における外国語（英語）教育が導入されて以来、そのあり方については、現場での実践を重ねながら様々な課題が検討されてきた。本研究で扱うのは、その中でも、「読むこと」「書くこと」に関わる文字言語の導入の問題、及び、評価のあり方の問題である。韓国で始まった小学校英語教育を皮切りに、中国や台湾でも次々に小学校で英語教育が始まり、日本も「総合的な学習の時間」の一部として「英語活動」という名称で始まった。日本以外の国々が、当初から「読むこと」「書くこと」を含めた4技能を扱っていたのに対して、日本は文字言語の導入には消極的であり、また評価についても、数値化した評価について同様に消極的であった。

しかしながら、本研究で扱うように、2020年から実施される小学校学習指導要領（文部科学省, 2018a）では、小学校外国語（英語）教育の教科化、それに伴う評価の仕組みの導入など様々改訂が実施される。このような新たな仕組みのあり方について、本研究では、その概略をまとめ、導入する上での課題を検討したい。

2. 次期学習指導要領における文字の指導の扱い

2.1. 小学校学習指導要領（文部科学省, 2008a）における外国語活動

小学校学習指導要領（2008a）で、小学校高学年に必修の領域として導入された「外国語活動」では、外国語活動の目標の中で、「外国語を通じて、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませる」という文言を掲げていた。この理由として文部科学省(2008b)では、「小学校段階の外国語の学習については、聞くことなどの音声面でのスキル（技能）の高まりはある程度期待できるが、実生活で使用する必要性が乏しい中で多くの表現を覚えたり、細かい文構造などに関する抽象的な概念を理解したりすることを通じての学習の興味・関心を持続することは、児童にとって難しいと考えられる。」とされていた。

またこの時には、外国語（英語）教育に対する評価の観点と趣旨について、中学校外国語科では、その観点として、①コミュニケーションへの関心・意欲・態度、②外国語表現の能力、③外国語理解の能力、④言語や文化についての知識理解、とされたのに対して、小学校外国語活動では、①コミュニケーションへの関心・意欲・態度、②外国語への慣れ親しみ、③言語や文化に対する気付き、とされた。両者の間の違いとして、第1に、中学校外国語で②外国語表現の能力、③外国語理解の能力と表示してある部分は、小学校外国語活動では、②外国語への慣れ親しみ、と1つの項目にまとめられていることである。第2に、中学校外国語では、④言語や文化についての知識・理解、とされている部分が、小学校外国語活動では、③言語や文化に対する気付き、とされていることである。これらの違いから、中学校外国語では「外国語表現の能力」「外国語理解の能力」「言語や文化についての知識・理解」とされている部分が、いずれも「知識や技能」の蓄積を評価の対象にするのに対して、小学校外国語活動の「慣れ親しませる」「気付き」という部分は数値的な評

価にはなじみにくいと推察できる。

このように、小学校学習指導要領（文部科学省 2008a）では、小学校と中学校での外国語（英語）教育のあり方が異なることに加えて、評価のあり方も異なっていた。

2.2. 小学校学習指導要領（文部科学省 2018a）における外国語活動及び外国語科

平成29年公示の次期学習指導要領（文部科学省, 2018a）では、小学校における外国語教育の開始学年をこれまでの5年生から3年生に移し、5年生からは外国語科として教科化することが示された。

評価の観点については、学校教育法の規定に従って、①知識及び技能、②思考力・判断力・表現力等、③主体的に学習に取り組む態度、を「学力の3要素」として採用し、これまで、小学校と中学校で外国語教育の評価の観点が異なっていたものが統一されることになった。

これらの改訂に伴って、「知識・技能」の項目については、外国語活動（小学校中学年）では、「外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、簡単な語句や表現などの外国語を聞いたり言ったりしている。」「外国語を用いた体験的な活動を通して、日本語と外国語との音声の違いに気付いている。」というように、文部科学省（2008a, 2008b）では、おおむね小学校外国語活動（小学校高学年）で扱われていた内容を扱うこととなった。新設された小学校外国語科では、「外国語の4技能（聞くこと、話すこと、読むこと、書くこと）について、定型表現など実際のコミュニケーションにおいて必要な知識・技能を身に付けている。」「外国語の学習を通じて、言語の仕組み（音、単語、語順など）や、その背景にある文化などに気付いている。」の2項目が扱われる。

このように、これまで「聞くこと」「話すこと」といった音声言語を扱っていた小学校外国語（英語）教育は、外国語の4技能を扱うこととなったが、新しく導入される「読むこと」「書くこと」について、これまでの中学校外国語（英語）教育と同様の内容及び教授法が導入されるわけではない。時間数が週2時間程度と、中学校の時間数と異なっているばかりではなく、児童の発達段階も考慮する必要があるからである。

学習指導要領（文部科学省, 2018a）によって示された、「英語」の科目において読むことの目標は、下記のとおり設定されている。

> 読むこと
> ア　活字体で書かれた文字を識別し，その読み方を発音することができるようにする。
> イ　音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現の意味が分かるようにする。

> 書くこと
> ア　大文字，小文字を活字体で書くことができるようにする。また，語順を意識しながら音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を書き写すことができるようにする。
> イ　自分のことや身近で簡単な事柄について，例文を参考に，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする

小学校においてアルファベットが導入されるのは3年生である[※1]。学習指導要領中の、外国語活動の「英語」の目標において、「文字の読み方が発音されるのを聞いた際に, どの文字であるかが分かるようにする」という「聞くこと」の一部として示されている。すなわち、音声 /eɪ/ を聞いた際に、文字の「A」ないしは「a」を選択できるような力が想定されている。外国語科の文字指導は、外国語活動においてアルファベットの読み方を視覚認知・識別できるような力が素地として育まれた状態であるということである。ここまでを念頭におき、本稿では学習指導要領における読むこと・書くことを評価する際の具体的観点と指導について論じていく。

3. 「読むこと」「書くこと」の評価の枠組み

3.1. 目標とされる技能と言語材料

技能としての「読むこと」「書くこと」の評価の枠組みを設定するのに先立ち、「読む」「書く」ということの定義を確認したい。「読む」「書く」が一般的に用いられる言葉であることによって、曖昧さが伴う。

一般的に用いられている「読む」との意味は、広辞苑が示すところの（a）文章・詩歌・経文などを、1字ずつ声を立てて唱えること、（b）文字・文書を見て、意味をといて行くことである。学習指導要領においても、アルファベットの「読み方が発音できる」ことと語句や表現の「意味が分かるようにする」ことが目標に挙げられていることから、読むことができているかの評価は「発音（あるいは音読）する」「意味を理解する」という2つの観点で行われることになる。

「書く」ことには（a）文字をしるす、（b）文に作る・著作する、という意味が含まれる。学習指導要領の記述には、「書く」と「書き写す」という2つの言葉が用いられている。「写す」とは、現物を別の用紙などに書き取ることであり、先に示した辞書的な意味のうち文字を記すことに該当する。具体的な教育活動場面においては、お手本を見ながら書くことが想定される。ただし、練習段階においてペンマンシップ等で行われるような、灰色で印刷された文字を上から書きなぞることは含められないといえよう。

続いて、書き写すではない「書く」ことが意味していることについて検討したい。書くことのひとつはアルファベットを「活字体で書くことができる」であるため、辞書的な意味の文字を記すことと言える。もうひとつには、「例文を参考に，音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書く」ことで、辞書が示すところの「文に作ること」とも解釈できる。しかしながら、「例文を参考に（中略）書く」問題においては、例文及び必要な語や語句が語群で示されることが想定できる。小学校段階において、語彙を暗記することは求められておらず、児童にとって何も手がかりがない問題設定は現実的ではない。ここでの「書く」ことは、（たとえ文の内容は児童が言いたい内容にあたる語句を選びながら創造的に文を作成しているとはいえども）、先の「書き写す」ことで述べた「お手本を見ながら書く」に近い活動である。すなわち、先の「書き写す」よりも思考・判断を求められる活動ではある一方で、技能としては文字を記すことの範疇であるといえる。

「読むこと」「書くこと」という技能は上述のように理解することができ、また、指導要領で述べられている言語材料は、文字レベル、語や表現レベル（語、語句、表現）、文レベル（1文、まとまりのある文章）の3つに分類できる。ここまで述べてきた目標とされる技能と言語材料をまとめると、図1のように理解することができる。ただし書くことについては、先述のとおり、一般的な作文をするような活動まで求められていないことに留意されたい。

		文字	語や語句、表現	1文、まとまりのある文
書くこと	書く	⑩ 文字を書く 【書くこと ア】 ※4線を使用	⑪ 語、語句、表現、文を書く 【書くこと イ】【3つの柱(2)】（例文を参考に）（語順を意識）	
	書き写す	~~⑦ 文字を書き写す~~	⑧ 語や語句、表現を書き写す 【書くこと ア】 (語順を意識)	⑨ 文を書き写す *ワークシートの例は少ない
読むこと	理解する	~~④ 文字を理解する~~（理論的に不可能）	⑤ 語や語句、表現を読んで理解する 【読むこと イ】 【3つの柱(2)】	~~⑥ 文を読んで理解する~~
	発音する	① 文字を発音する 【読むこと ア】	② 語や語句を音読する	~~③ 文を音読する~~

図１「読むこと」「書くこと」の評価マトリクス

注 【 】は学習指導要領で目標として記載されている項目である。×のついたセルは、学習指導要領及び解説の両方において言及されていない項目を表している。網掛け部分は、*We can!*（文部科学省，2018c）のダウンロードコンテンツであるワークシートに活動が用意されていることを表している。

図1中で【 】の記載があるセルが、学習指導要領（解説ではなく、学習指導要領本文）の目標として挙げられている観点である。また、×のついていないセルは、学習指導要領の解説部分などで記述がある観点である。すなわち、6年生の修了段階には、文字に関する①と⑩の観点、語や語句、表現、それらと例文を活用して書く文（ないしは文章）に関する⑤⑧⑪の観点の力が身に付いていることが求められており、必然的に評価が伴う。また、②⑤⑨の観点についても、適宜評価が必要である。ただし、学習指導要領に明記されていない（×で示された）観点を無視してよいわけではなく、最終的に目指される力を身に付けるためには、その前段階にある力を形成的に評価し、目標とするところまで導き指導する必要がある。次項において、図1の区分に基づき、「読むこと」と「書くこと」それぞれの評価について、その評価対象と形式について述べていく。

3.2. 読むことの評価

図1に示された①～⑥に準じ、出題や解答の形式について述べる。

①～③に示された、発音する・音読する力を評価するためには、面接形式のテストをする必要がある。①では評価者（教員）がアルファベットの書かれたカードなどを提示し、その文字の読み方の音声化を促す形式である。②と③については学習指導要領の目標等に明記されていないが、音声で慣れ親しんでいる語や語句、表現、そしてそれらが含まれる文（あるいはまとまりのある文）を、自らの音声によって音読することは、後の書く技能につなげるために肝要なステップである。個々の児童を面接形式で評価する必要はないかも知れないが、教員が形成的評価の扱いで児童の力を見取り、必要な支援・指導をすることが求められる。

⑤以降の力を評価するためには、筆記テストが可能である。⑤・⑥に示された、意味を理解する力を評価することについては、面接形式のテストを行うこともできる。しかしながら信頼性の観点から問題数を増やす必要があり、時間がかからず一度に大勢を対象に実施することができる筆記テスト[※2]をすることが現実的である。注意すべきは、意味を理解しているかを評価することが単純に日本語訳を求めるものになってはいけないということである。語によっては（例：イラストで表しにくい形容詞や動詞）日本語を用いることも考えられるが、これまで児童が授業において理解していた「意味」がイラストを中心としていたことから、英語表現とイラストを結びつけるような形式が想定される。

3.3. 書くことの評価

「書くこと」の評価は、児童による筆記が求められるため、必ず筆記テストが行われることになる。

⑦～⑨は語や語句、表現、文（章）を書き写すことである。そして繰り返しになるが、⑪にあたる「書く」ことには、「書き写す」ことと切り離すことができない。そのため、⑪に示される語や語句、表現、そしてそれらを活用して文を書く力を評価するためには、問題提示時点で例文と語群の用意が必須である。語群については、多すぎれば児童が選択するのに非常に長い時間を要するうえに、適切な選択肢を教員が準備することも難しい。教科書巻末資料を辞書的に使用することも可能ではあるが、辞書引き指導が授業内で十分に行われていることが前提条件となる。また、テストの妥当性の面から、語群から語（句）を選択することが、「書くこと」以前に読んで理解する過程が含まれていることにも留意すべきである。すなわち、語群に含まれる語（句）は、児童が必ず読んで理解できるという条件においてのみ「書く力」を測定しているということになる。

⑩で示されるアルファベットを書くことについては、「書き写す」のではなく「書く」ことが求められていることから、次のような問題の形式が想定される。

(1) 教員などによって発音されたアルファベットを文字で書く
(2) 大（小）文字で示されたアルファベットの小（大）文字を書く
(3) 自分の名前や友達の名前の頭文字をアルファベットの大文字で書く

「読むこと」及び「書くこと」の評価は、ここまで述べてきたように整理することができる。ここからは、評価をする段階に至るまでの授業中の指導段階において、どのような教材を使用して指導することができるのか、その可能性について検討する。

4. 外国語活動における文字指導の教材

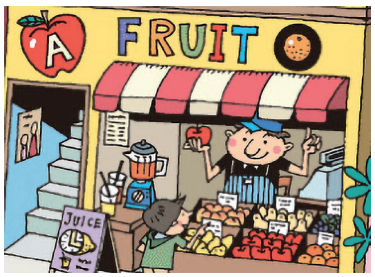
現在、全小学校では、2020年度の全面実施に向けて、2018・2019年度を移行期間とし、外国語活動は年間15時間、外国語科は年間50時間を必須として授業を行っている。一方、研究校等では、全面実施と同様に、外国語活動は年間35時間、外国語科は年間70時間の授業時間数で行っている。そして、移行期の外国語活動、及び、外国語科に対応したテキスト教材が文部科学省で作成され、全小学校に配布されている。したがって、本稿では、これらのテキスト教材を使用して、「読むこと」「書くこと」の指導についての現状を述べ、学習指導要領に掲げられた「読むこと」「書くこと」の目標、及び、評価における課題を考察する。

4.1. 読む活動

外国語活動で使用されるテキスト *Let's Try!* では、「文字への興味・関心」及び、「文字に慣れ親しませること」を前提にしている。したがって、児童がコミュニケーション活動で使用する「絵カード」には、下記のように、絵が大きく描かれた下に文字が小さく併記されている。多くの児童は、絵を見てapple を理解しているので、「音声」を聴いて「絵」を結び付けることはできる。しかし、文字のみの表記では認識することは難しい。

apple （*Let's Try! 1*：巻末絵カード）

また、テキストには文字を読まなくても絵を見れば、そこに表記されているものがわかるような構成の内容も掲載されている。例えば、以下の「Let's Watch & Think」の活動では、「FRUIT」のお店で売っている品物や看板に書かれているリンゴやオレンジの絵で何のお店か認識できる。また、リンゴの絵の中に「A」の文字が書かれており、この文字と巻末の絵カードに記されている「apple」と関連付ければ、この店が「フルーツ」を売っていることが容易に理解でき、児童は、この活動を通して文字の持つ意味を理解することができる。



（*Let's Try! 1*: p23）

さらにまた、テキストには、活動内容を日本語で示し、その下にコミュニケーション場面の絵と英語でのやりとりが提示されている。例えば、以下の様に、日本語でカードを友達におくることを示し、音声で慣れ親しんだ表現が英語で書かれているため、児童は語彙（文）を読まなくても、この語彙（文）の持つ意味は容易に認識できる。

（*Let's Try! 1*：29）

デジタル教材では英語の歌やChantなどの歌詞等が表示されており、児童はリズムに合わせて。語彙（文字）の色が変わるところを見て発話を繰り返しながら、絵と同時に語彙（文字）を認識することができる。

Rain, rain, go away,

（*Let's Try!*：Unit 2 "Rain, rain, go away" の歌より）

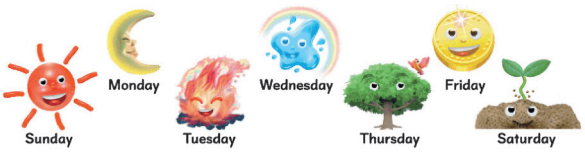
4.2. 書く活動

外国語活動では、「書く活動」は示されていない。しかしながら、文字に興味関心を持ち、「書いてみたい」「書きたい」という気持ちのある児童には、パスポートに書く時の自分の名前の表記の仕方や友達の名前の頭文字、また、アルファベットの仲間分け等の活動の時に、文字カードを置くのではなく、「書き写す活動」もできると思われる。

5. 外国語科における文字指導の教材

5.1. 読む活動

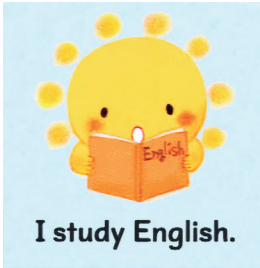
2018・2019年度に移行期に使用されている外国語科のテキスト *We Can!* では、特に冒頭見開きで内容語（主に名詞句）が示されている。また、外国語活動のテキストと同様に、*We Can!* においても、読まなくても絵でわかるような構成となっている。



（*We Can! 1*：20）

（*We Can! 2*：35）

外国語科でみられる文字を読む活動では、絵カードの表記と同様に「絵とその絵を表す文」が併記されていることである。特に、音声によるコミュニケーション活動で慣れ親しんだ表現に対して、文字・語彙・文を「読む活動」へと繋げるものが主である。



（*We Can! 1*：26）

外国語活動と同様に外国語科においても、活動内容を日本語で示し、その下にコミュニケーション場面の絵と英語でのやりとりが提示されている。しかしながら、以下の様に、日本語は「友だちの好きなものや好きなこと、ほしいものについてたずね合い、わかったことを表に書こう」と書かれているが、その下にある英語は、

A："What do you want for your birthday?"
B："What dolor do you like?"

と書かれている。音声で慣れ親しんだ表現について、文字・語彙・文を「読む活動」に繋げているが、日本語を英語に訳したものではない。

（*We Can! 1*：14）

構文を意識した提示としては、*We Can! 2*　U3「He is famous. She is great.」に、初めて掲載されている。このレッスンでは、語彙と、その語彙が表現されている絵が描いてある「絵カード」等を使って、音声で慣

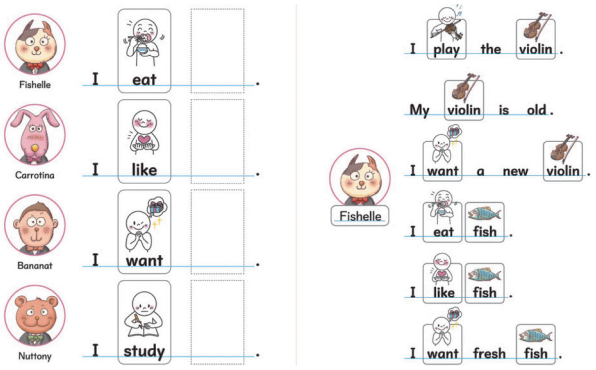
れ親しんだ文を可視化し、児童が「主語」「動詞」「目的語」の語順に気付いたり、気付いたことを生かして、絵カードを並べ替えて文を作ったりする活動が設定されている（文部科学省 2018d：24）。

筆者が参観した授業では、以下のような順序で指導がなされていた。

① テキストの登場人物ではなく、自分のことについて話すために、「I」のカードの横に「eat」のカードを並べ、食べるジャスチャーをした後、次に「目的語」に並べる食べ物の絵カードを、教師が児童に数枚選ばせて、「I」「eat」の横に、数枚の絵カードを縦に並べさせた。
② 「eat」のカードを「like」に代えて、児童が並べた食べ物の絵カードから、「児童の好きな食べ物」を児童に選ばせて、「I」「like」のカードの横に食べ物の絵カードを縦に並べさせた。
③ 「like」のカードを「want」に代えて、児童の好きな食べ物の中から、「児童が食べたいな！（先生に）買って欲しいな！」と思う食べ物のカードを1枚選ばせて、「お願い」するジャスチャーをしながら、「I」「want」のカードの横に並べた。

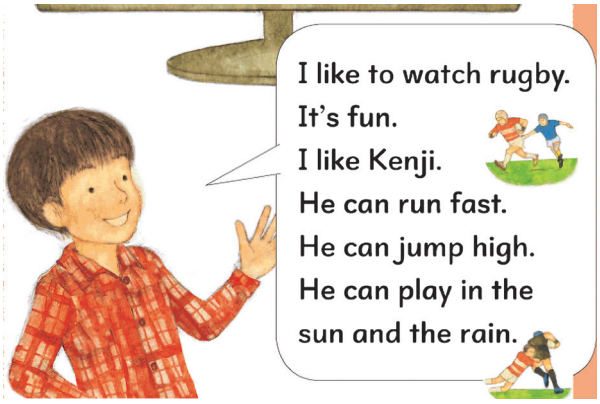
この活動では、児童は、「like」「want」の語彙を読みながら「動詞」の位置を認識し、「主語」「動詞」「目的語」の語順を意識しながら、食べ物絵カードを並べていたと思われる。

なお、このレッスンでの目標は、「これまでに音声で十分に慣れ親しんだ文を取り上げ、どのような語順になっているかに気付き、それを意識して話したり書いたりできるようになること」と明記されている（文部科学省，2018d：24）。



（*We Can! 2*：22-23）

さらに、語順を意識させる活動として、巻末の絵カードを使用して、可視化しながらクイズのヒント文を作る活動や、「STORY TIME」では、学習した語彙を使用して、「主語 I/He」「動詞 like/ can run/ jump/ play」「目的語」等の語順を意識しながら、ファンのKenjiについて紹介している文を読んで理解する活動がある。



（*We Can! 2*：25）

また、デジタル教材では、外国語活動と同様に、Chantなどの歌詞表示が「読む活動」には有効である。

5.2. 書き写す活動・書く活動

We Can! 1 Unit 2の「Read & Write」では、「カード（Happy Birthday!）を作成する活動」が掲載されている。この活動では、提示されている文を見て「書き写す活動」を行う。

We Can! に準拠しているワークシートでは、「お手本をよく見て、高さや形に気を付けてアルファベット文字を「書き写す」ことや、語彙や文の文字を「なぞり、その後、書き写す活動」等がある。

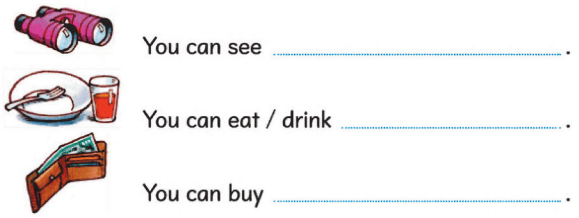
We Can! 1 Unit 4 から「Let's Read & Write」では、まとまりのある文章を「書き写す・書く活動」が導入されている。Unit4では、二人の登場人物の日常生活について、以下の文を「読んだり・書いたりする活動」が導入されている。

“I get up at 6:00. I always do my homework at 6:00. I sometimes wash the dishes.” “Hello! My name is Riko. I get up at 6:00. I usually wash the dishes. Thank you.”

なお、これ以降の各Unitの「Let's Read and Write」では、文章を「書き写す・書く活動」が組み込まれている。

そして、「Let's Read and Write」のように、与えられた文章を「書き写す・書く活動」から、自分の伝えたいことを表現するために、ワードリストから語彙を選んで「書く活動」がある。例えば、*We Can! 1* Unit 6のActivityのように、「お勧めの国を紹介する」ために、「主語」「動詞」が以下の様に示され、“You can see ～. You can eat/ drink ～. You can buy ～.”

「目的語」に入れる語彙を選んで、自分で「書く活動」がある。「主語」は会話の相手Youであり、「動詞」については、絵が手掛かりとなり、児童が容易に理解できる。

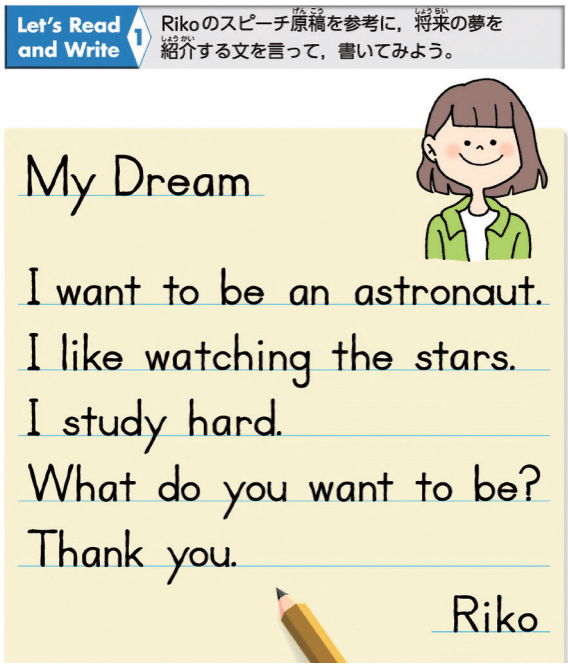


（*We Can! 1*：44）

また、*We Can! 2* Unit 4では、「自分たちの町について発表しよう」のテーマで、Show & Tellの手法で発表するために、町のポスター作りをする活動でも、「町にあるもの、町にないもの」について、「目的語」に入れる語彙を選んで、自分で「書く活動」が示されている。

（*We Can! 2*：31）

ワードリストから語彙を選んで「書き写す・書く活動」から、*We Can! 2* Unit 8「Let's Read and Write」では、「Rikoのスピーチ原稿を参考に、将来の夢を紹介する文を言って、書いてみよう」というような、誌面の原稿や職業名、これまで学習した文章を基にして、自分で語彙や表現を選んで、「自分の将来の夢」について紹介するまとまった文章を「書く活動」が示されている。なお、指導書では、「書かせる指導」として、以下の4点を注意点として挙げている。「①4線上に丁寧に書く。②大文字と小文字が使われる箇所に気を付けて書く。③スペース（単語と単語の間）に気を付けて書く。④ピリオドや符号を忘れずに書く。この原稿は、みんなで読むものであることを伝え、児童に丁寧に書く必要性を感じさせるようにする。」と示されており、中学校で英語が苦手な生徒は、「書くこと」の基本ができていないことにも言及している（文部科学省, 2018d：80）。



（*We Can! 2*：62）

一方、次期学習指導要領では、「書くこと　イ　自分のことや身近で簡単な事柄について、例文を参考に、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を用いて書くことができるようにする」と述べられているように、書くことに抵抗をなくすためには、始めに、Worksheetを使用して、「語を選んで書き写す活動」を行う。その後、児童のオリジナルとして、Worksheetに示された以外の語彙を使用して、自分の気持ちや本当に伝えたいことを「書く活動」で行えば、円滑に中学校外国語教育へと繋げることができると思われる。

6. 課題と展望

令和2（2020）年度は小学校における外国語教育（外国語科）の全面実施元年となる。今後は文部科学省による教材 *We can!* に替わる検定教科書が用いられることになる。小学校において、教科のテストは、各教科書に準拠したものが出版社によって作成されていることが多い。各出版社による教材にも、教員をサポートするテスト例や評価例が示されるであろうが、本稿では多くの教員に念頭においてほしい、「読むこと」「書くこと」を評価するための大きな枠組みを提示した。その中で、語順を意識しながら語や語句、表現を書くことが、現在の文部科学省教材には不足しているという課題を指摘した。このこと意外にも、今後「読むこと」「書くこと」のテストを実施する際に検討されるべきこと、及び、評価を行う段階に導くために下記を留意していくべきである。

(1) 信頼性の担保

信頼性の高い評価を行うために問題数を増やすことが必至である。文字を発音することについては、3・4年生の外国語活動で「聞くこと」「話すこと」に慣れ親しんでいることがから比較的スムーズな試験実施ができると予想されるが、「読むこと」「書くこと」には、1問1問にしっかり時間をとる必要がある[※3]。十分な問題数と解答時間を確保することは、公正な評価をするための第一段階とも言えよう。

(2) 場面の設定

児童が身に付けるべき思考力・表現力・判断力等として「コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて」読んだり書いたりする力が挙げられている。ドリル学習のような脱文脈的に語や語句を読んだり書いたりすることは（必要な場面もあるが)、最終的に求められているところではない。小学校教員にとって、自身が受けてきた筆記テストは中学校以降に行われたテストをイメージするものとなりかねない。1問1答形式に陥ることなく、大問ごとの場面設定や、設問同士の関連性が工夫される必要がある。

(3) 授業で設定すべき活動

授業内においては、児童はピクチャーカードに併記された英単語を目にすることが、いわゆる、文字に「慣れ親しむ」機会となっている。しかしながら、英単語の意味となるイラストが掲載されていれば、児童は文字を見ずに英語を発音することが可能である。文字を読むことの力を見取るためには、授業内の日頃の活動の中に、文字だけの提示でも音読をするといった取り組みが必要といえよう。

小学校における外国語科導入、殊に文字指導が始まることについては、これまで外国語活動で行われていたゲームや活動を通じた「楽しい英語の時間」から急激に様相が変わることにより、そしてテストをすることで「勉強」の色合いが濃くなり、英語嫌いにつながらないか、といった懸念がされることが多い。しかしながら、授業において児童が分かる・できる経験を増やすことは児童の学びを動機付ける大きな要因であることは、外国語（英語）科に限らずどの教科においても当てはまることである。評価をすることが成績による序列をつけることではなく、指導のステップのひとつとして、できることを増やしていくことが目指されていることを、教員は十分に理解をして、児童にも伝えていくことが必要であろう。

注　釈

1　3年次国語科においてローマ字を学習する際にもアルファベットを学ぶことになるが、英語の体系として学ぶアルファベットではないという観点から、本稿では取り扱わない。

2　「筆記テスト」としたが、成績評価に含めず形成的評価を行うという目的で行われる評価であれば、いわゆる「振り返りシート」の中に、「今日できるようになったこと」を確認するための問題として提示することも考えられる。

3　高橋・山内・柳（2019）では、実施された筆記テストを受け、書くための所要時間が留意点として挙げられた。

謝　辞

本研究は、「「読むこと・書くこと」の主体的協働的な学びにおける初等英語カリキュラム開発と評価」（H29 ～ H31，課題番号17K03008，代表：高橋美由紀）の成果の一部です。

文　献

高橋美由紀・山内優佳・柳善和「小学校外国語『読むこと』『書くこと』に関するテストへの提案6年次修了段階にできることの調査」『愛知教育大学研究報告．人文・社会科学編』第68輯，25-33.

文部科学省（2008a）『小学校学習指導要領』東京書籍.

文部科学省（2008b）『小学校学習指導要領解説　外国語活動編』東洋館出版社.

文部科学省（2018a）『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語活動・外国語編』開隆堂

文部科学省（2018b）『Let's Try!』東京書籍

文部科学省（2018c）『We Can!』東京書籍

文部科学省（2018d）『We Can!　指導書』東京書籍

（2019 年 9 月 19 日受理）